





【文学部】中期計画総括シート

提出日:2024年1月17日

責任者	文学部長	担当部局	文学部
-----	------	------	-----

1. 文学部の理念、目的、各種方針

文学部の理念	変更の有無
文学部が教育研究活動の中心に据える理念は次の二点に集約される。 1. スクールモットーである“Mastery for Service”に則ったキリスト教主義教育 2. 人間存在とその営みや文化を探求する人文学の修得による全人的陶冶	有・ 
文学部の目的	変更の有無
人間存在とその営みを、さまざまな方向からの検討を通じて明らかにする専門的能力を涵養するとともに、キリスト教主義教育を通して豊かな人間性を育み、現代社会を理解するための幅広い視点と教養の獲得を重視して教育研究を進める。それにより、包括的で幅広い教養と高度で専門的な知識を合わせ持ち、深い洞察力を身につけた人間を育成する。 以下に学科ごとの目的を掲げるとともに、さらに三学科に共通する目標を示す。 文化歴史学科 文化歴史学科は、真・善・美の理想を求めて空間と時間の中を生きる人間の基礎的構造及び歴史について、教育研究を行う。 総合心理科学科 総合心理科学科は、現代社会に生きる人間の心理的諸相について、認知・行動・発達の観点から、その病理を含めて、教育研究を行う。 文学言語学科 文学言語学科は、言葉を持ち文化を形成する人間の営みについて、文学と言語の両面から教育研究を行う。 共通の目標 1) 基礎的能力を育み幅広い教養の獲得をめざす教育研究 基礎・基本を重視した教育を通じて、主体的に課題を設定しこれを解決できる能力を養成するとともに、人文学的素養に立脚した真の知性と品格をそなえた人間の育成をめざす。 2) 学際性に富む教育研究 広範で多様な学問領域にふれることを通じて均整のとれた柔軟な思考能力を涵養するとともに、文化全体を見渡す視野と方法を身につけ創造的に考え自ら行動することのできる能力を養成する。 3) 自らが得た知の社会への発信を重視する教育研究 豊かな人間性と幅広い教養を持ち、よき住民、市民として地域社会や国家はもとより、国際社会においても重要な貢献をなし得る能力を養成する。同様に、よき社会人、職業人として各界に積極的な貢献をなし得る能力を養成する。 4) 他者との関わりを大切に自己実現の端緒を掴ませる教育研究 自分の周囲には自身とは異なる発想や考えを持った人がいることに改めて気付かせ、他者と粘り強く対話し、真の意味でのコミュニケーションを図ることを通じて己の人間の成長の端緒を掴ませていく。 5) 深い専門的知識の獲得と高度な思考能力の育成との接続をめざす教育研究 高度専門職及び研究職の養成(大学院教育)も視野に入れて、その基盤となる学問的知識及び技能を体系的に獲得させるとともに、それを基にした思考能力によって社会に寄与しうる新たな知の発見に向かう人間を育てる。	有・ 
学位授与方針(DP)	変更の有無
Kwansei コンピテンシーの獲得を念頭において文学部のディプロマ・ポリシー(DP)を以下のとおり定める。 文学部は、「建学の精神に則ったキリスト教主義教育」および「人文学の修得による全人的陶冶」を中心的な理念とし、広範で多様な学問領域の中での基礎・基本を重視した教育を通じて以下の能力を身につけた学生に対して学士(文学)の学位を授与する。 1. 基礎・基本を重視した教育を通じて得られる、人文学的素養に立脚した真の知性と品格をそなえ、主体的に課題を設定しこれを解決できる能力。 2. 広範で多様な学問領域に触れることで得られる文化全体を見渡す視野と方法に基づき、均整のとれた柔軟な思考能力及び、より創造的に考え自ら行動することのできる能力。 3. 豊かな人間性と幅広い教養を持ち、よき市民として地域社会や国家はもとより、国際社会においても重要な貢献をなし得る能力。同様に、よき社会人、職業人として、各界に積極的な貢献をなし得る能力。 4. 高度専門職及び研究職の基盤となる強固な学問的知識及び技能に基づき、学問的な立場から社会に貢献できる能力。 3学科それぞれの学位授与の方針は以下のとおりである。 1. 文化歴史学科 ①哲学倫理学・美学芸術学・地理学地域文化学・日本史学・アジア史学・西洋史学の基礎的知識のもとに、人間存在の思想的・芸術的・空間的・歴史的側面及びそれに関わる活動について主体的に課題を発見し、適切に問題を設定する能力と、幅広い観点から対象を洞察し、問題を合理的に解決する能力を身につけていること、②文化や歴史に関わる広範で多様な学問領域に触れることを通じて、広い視野と均整のとれた柔軟な思考能力を身につけていること、である。 2. 総合心理科学科 ①心理学の基礎的知識のもとに、人間存在の心理的・行動的側面及びそれに関わる活動について主体的に課題を発見し、適切に問題を設定する能力と、幅広い観点から対象を洞察し、問題を合理的に解決する能力を身につけていること、②心理学の諸分野に関わる広範で多様な学問領域に触れることを通じて、広い視野と均整のとれた柔軟な思考能力を身につけていること、である。 3. 文学言語学科 ①日本文学日本語学・英米文学英語学・フランス文学フランス語学・ドイツ文学ドイツ語学の基礎的知識のもとに、人間存在の文学的・言語的側面及びそれに関わる活動について主体的に課題を発見し、適切に問題を設定する能力と、幅広い観点から対象を洞察し、問題を合理的に解決する能力を身につけていること、②文学や言語学に関わる広範で多様な学問領域に触れることを通じて、広い視野と均整のとれた柔軟な思考能力を身につけていること、である。	有・ 

<p>教育課程の編成・実施方針(CP)</p>	<p>変更の有無</p>
<p>4年間のカリキュラムを通じて、以下のような教育を行う。</p> <p>文学部の教育理念と目的に沿って設定された様々な授業科目の中から、各学科・専修の求める専門性に従った履修体系と学生の主体的な関心に基づいて科目を履修し、必要とされる単位数を修得することが学士(文学)学位授与の要件となる。特に文学部では学修の集大成として卒業論文の作成が義務づけられている。</p> <p>3 学科それぞれの年次毎のカリキュラムの理念は以下の通りである。</p> <p>1. 文化歴史学科 第1学年度では、大学における学修の基礎を身につけ、学科に関連する諸領域への関心を深める。 第2学年度では、学科・専修の提供する概論等の専門講義科目から将来の専門に関わる科目に重点をおいた学修を導く。さらに、資料・史料の読解・調査やテキストの解釈などを目的とする研究科目の提供を通じ、自ら読み解き理解することのできる基礎的学力を養成する。 第3学年度では、所属する専修が提供する演習科目、研究科目、特殊講義科目、文化歴史学科他専修が提供する学科科目等を通じて、専門的な研究能力の養成を行う。 第4学年度では、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、専修諸分野のそれぞれにおいて、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い卒業研究を完成させる。</p> <p>2. 総合心理科学科 第1学年度では、大学における学修の基礎を身につけ、学科に関連する諸領域への関心を深める。 第2学年度では、学科・専修の提供する専門講義科目に重点をおいた学修を導くとともに、心理学に関する専門用語の習得や英文読解力を養う研究科目、心理学の研究方法を身につけるための実験実習科目の提供を通じて基礎的知識や技術を養成する。 第3学年度では、専修が提供する演習科目、研究科目、実験実習科目、専門講義科目を通じて、専門的な研究能力の養成を行う。 第4学年度では、それまでに身につけた専門知識や能力をもとに、各研究分野において学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い卒業研究を完成させる。</p> <p>3. 文学言語学科 第1学年度では、大学における学修の基礎を身につけ、学科に関連する諸領域への関心を深めるとともに関連する言語の修得につとめる。 第2学年度では、学科・専修の提供する専門講義科目に重点をおいた学修を導くとともに、文献資料の読解や作品・テキストの解釈などを目的とする研究科目を通じて、自ら読み解き理解していくことのできる基礎的学力を養成する。 第3学年度では、所属する専修が提供する演習科目、研究科目、専門言語科目、特殊講義科目、文学言語学科他専修が提供する学科科目等を通じて、専門的な研究能力の養成を行う。 第4 学年度では、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、専修諸分野のそれぞれにおいて、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い卒業研究を完成させる。</p>	<p>有・</p>
<p>学生の受け入れ方針(AP)</p>	<p>変更の有無</p>
<p>【関西学院大学(学士課程)】</p> <p>I. 関西学院大学アドミッション・ポリシー 世界を視野におさめ、他者(ひと)への思いやりと社会変革への気概を持ち、高い識見と倫理観を備えて自己を確立し、自らの大きな志を持って行動力を発揮する“Mastery for Service”を体現する世界市民を育成することが関西学院のミッションです。 関西学院大学は、このミッションに共感し、大学での学びや諸活動の中で、自分への挑戦をし続ける意欲にあふれ、さまざまな適性を有する多様な背景をもった学生・生徒を世界のあらゆる地域から受け入れます。 そのために、これまでに培われた確かな基礎学力、活動や経験を通じて身に付けた資質、能力、学ぶ意欲や人間性などを、多様な入試制度により多角的に評価することを基本的な方針としています。</p> <p>II. 各学部のアドミッション・ポリシー 文学部アドミッション・ポリシー 文学部は、建学の精神に則ったキリスト教主義教育ならびに人文学の修得を通じて、全人的陶冶を行うことを教育理念としています。多様な領域にまたがる人文学の教育・研究のために、文学部は文化歴史学科、総合心理科学科、文学言語学科の3学科で構成され、さらに11の専修に区分されていますが、どの専修に所属しても学生それぞれの関心に従って基礎的な科目群から専門的な科目群まで幅広く履修できるよう柔軟なカリキュラムを組んでいます。また最終的な到達目標として卒業論文の作成が必修とされています。4年間の勉学を通して、主体的に学び、自ら問題を見出し追究していく姿勢が重要です。高等学校の学習においても、基本的な科目全般にわたって基礎学力を充実させるとともに、幅広く客観的な視野と、先入観や画一的なものに見方に囚われない柔軟な思考力、さらには自らが興味関心を持ったテーマに対して粘り強く取り組んでいく姿勢を培っておくことが求められます。このような総合的な知的基盤を備え、かつ自らの見出した研究課題に積極的に取り組んでいかれる資質に富んだ者を、一般入学試験・各種入学試験それぞれの特徴を生かして、本学部の学生として受け入れることを基本方針としています。</p> <p>III. 入学試験毎のアドミッション・ポリシー 1. 一般選抜入学試験 一般選抜は、各学部での教育に必要な「総合的な学力を持つ受験生を選抜する」ものです。 一般入学試験では各学部の教育理念・目標に基づき試験教科・科目、配点を設定し、筆記試験により関西学院大学で学ぶために必要な学力「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を判定するための問題を独自に作成しています。 全学部日程の文系入学試験では本学で学ぶために必要な「英語」「国語」を必須とし、「日本史」「世界史」「地理」「数学(記述式)」を選択科目とし筆記試験を実施します。全学部日程の国際学部については、高い英語能力を有する生徒を評価するため、「英語」に特化した「英語」「英語論述」による入学試験も実施しています。 学部個別日程の文系入学試験では本学で学ぶために必要な「英語(記述式含む)」「国語(記述式含む)」を必須とし、「日本史」「世界史」「数学(記述式)」を選択科目とし筆記試験を実施します。なお文学部・法学部では「日本史」「世界史」「数学(記述式)」に加えて「地理」を選択科目に加えています。人間福祉学部については学部個別日程において「英語(記述式含む)」「国語(記述式含む)」の2科目による筆記試験を行っています。 理系入学試験においては全学部日程を2日間実施、入試制度も2種類実施しています。総合型および数学・理科重視型においては、本学で学ぶために必要な「英語」「数学(記述式)」を必須とし、理科(記述式)「物理」「化学」「生物」のいずれかを選択する筆記試験を実施しています。 一般入学試験共通テスト併用日程／英数日程は、英語・数学科型、共通テスト併用型・英語、共通テスト併用型・数学の3方式を実施しています。英語・数学科型は、関西学院大学の「英語(記述式含む)」と「数学(記述式)」による筆記試験を実施し、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を判定しています。共通テスト併用型・英語、共通テスト併用型・数学は、関西学院大学の「英語(記述式含む)」または「数学(記述式)」に、大学入学共通テストの教科・科目の得点を加味し、各学部で学ぶための学力と総合的な基礎学力を有する生徒を選抜するために実施しています。</p> <p>大学入学共通テストを利用する入学試験は、「一般入学試験とは異なるタイプの受験生を受け入れるための入試制度」と位置づけています。大学入学共通テストで実施している教科・科目の筆記試験をもとに、本学で学ぶために必要な総合的な基礎学力を「知識・技能」を中心に判定を行い、大学入学共通テストの得点のみで合否判定を行います。 1 月出願においては、総合政策学部3科目英数型を除く文系学部は「外国語」「国語」を必須として、「数学」「理科」「地理歴史」「公民」から高得点を採用する方式を3科目型、5科目型の方式で実施します。また「外国語」「国語」「数学」「地理歴史・公民」「理科」を必須とする7科目型を実施します。理系学部は「英語」「数学」を必須として各学科の学びに必要な科目について必須科目もしくは選択科目として加え、高等学校における各教科の基礎学力のうち「知識・技能」を評価します。</p>	<p>・無</p>

また、

3 月出願においては、文系学部は「英語」を必須とし、「国語」「数学」「理科」「地理歴史」「公民」から高得点科目を採用する方式を実施しています。理系学部は「英語」「数学」を必須として各学科の学びに必要な科目について必須科目もしくは選択科目として加え、高等学校における各教科の基礎学力のうち「知識・技能」を評価します。

また、大学入学共通テストを利用する入学試験(1 月出願 3 科目型(英語資格・検定試験利用))、大学入学共通テストを利用する入学試験(1 月出願 5 科目型(英語資格・検定試験利用))は、「読む」「書く」「聞く」「話す」の英語の 4 技能を身に付けた生徒を選抜するために、提出された書類のうち英語資格・検定試験のスコアを出願資格として高く評価し、大学入学共通テストの教科・科目の得点を活用して実施する入学試験であり、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を得点として評価し、検定試験に取り組んだ「主体性」を高く評価します。

2. グローバル入学試験

グローバル入学試験は、入学後、本学のスーパーグローバル大学創成事業におけるインターナショナル・プログラム(国際教育プログラム)に積極的に取り組むことを希望する生徒や、将来、国際的な活躍を目指す生徒を対象に3つのカテゴリーで実施する入学試験です。

① 国際的な活躍を志す者を対象とした入学試験

<文系学部>

関西学院大学のアドミッション・ポリシーに基づき、本入学試験では、英語能力に加え、留学経験、模擬国連での活動など、自ら国際的な活動に取り組んだ実績を有し、国際的課題解決のための提案・実践に意欲を有するとともに、その国際的な活動で培った力を関西学院大学のインターナショナル・プログラム(国際教育プログラム)に挑戦することでさらに発展させ、国際社会で活躍できる力を身に付けることを志す者を求めています。

第1次審査では、書類審査および筆記審査を行い、「主体性」「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を総合的に評価します。第2次審査では、学部毎に実施する面接(口頭試問含む)により、志望学部における学びの意欲や学びの計画、人間性などを評価します。

② インターナショナル・バカロレア入学試験

関西学院大学のアドミッション・ポリシーに基づき、本入学試験では、国際的に認められた大学入学資格であるインターナショナル・バカロレアDP(ディプロマ・プログラム)の課程を修了後、統一試験に合格し、インターナショナル・バカロレア資格を有するとともに、入学後は、本学のインターナショナル・プログラム(国際教育プログラム)を通して、国際社会で活躍する能力を身に付けることを志す者を求めています。

第1次審査では、書類審査および筆記審査を行い、「主体性」「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を総合的に評価します。

第2次審査では、学部毎に実施する面接(口頭試問含む)により、志望学部における学びの意欲や学びの計画、人間性などを評価します。

③ 帰国生徒入学試験

関西学院大学のアドミッション・ポリシーに基づき、本入学試験では、家庭の事情等により海外に長期間滞在し、海外の教育を受けた者で、日本での生活や短期間の留学では身に付けることのできない主体性や価値観、多角的視点、困難を乗り越えた経験などを持ち、それらを本学での学生生活や学びに生かそうとする者を求めています。多様な背景を持つ学生が集い刺激し合うことで、キャンパスが活性化し教育的効果も望んでいます。さらに、帰国生徒が他の学生と相互交流を通して学識や人間性をより一層高め、将来の日本および世界を支えていく真の国際人として成長することにも期待します。

第1次審査では、筆記審査を行い、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を評価します。

第2次審査では、学部毎に実施する面接(口頭試問含む)により、志望学部における学びの意欲や学びの計画、人間性などを評価します。

3. 推薦入学

推薦入学は高等学校長の責任ある推薦により本学で学ぶために必要な学力を有する生徒を受け入れるものです。審査においては調査書、自己推薦書、志望理由書、学校長推薦書等の提出書類による書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

① 院内推薦入学

1) 関西学院高等部

関西学院高等部推薦入学は関西学院の一貫教育の大きな柱として位置づけられています。高等部でキリスト教主義教育による関西学院の建学の精神をもとに学んだ生徒を受け入れることにより、大学進学後もそれぞれの学部において、正課、課外活動、学内諸活動の面で学生の核となり、他の入学者に対しても良い影響を与え関西学院の学風を担うことを期待し実施するものです。

審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

2) 関西学院千里国際高等部

関西学院千里国際高等部推薦入学は、千里国際高等部の特色である国際教育と、キリスト教主義教育による関西学院の建学の精神をもとに学んだ生徒を受け入れることにより、大学進学後もそれぞれの学部において、正課、課外活動、学内諸活動の面で学生の核となり、関西学院大学の活性化に寄与することを期待し実施するものです。

審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

② 継続校推薦入学

啓明学院継続校推薦入学は、キリスト教主義教育により学んだ啓明学院高等部の生徒を受け入れることにより、大学進学後もそれぞれの学部において、正課、課外活動、学内諸活動の面で学生の核となり、関西学院大学の活性化に寄与することを期待し実施するものです。

審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

③ 提携校推薦入学

関西学院大学提携校推薦入学は、個性的でかつ高い資質をもつ生徒を受け入れるために実施しています。関西学院の建学の精神および教育理念を理解し、各校独自の特色を活かした優れた教育プログラムによって学んだ生徒を受け入れるものです。

審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

④ 系属校推薦入学

関西学院大学系属校推薦入学は、科学技術に強い興味・関心・意欲を持ち、グローバルな観点に立って国際社会での活躍を目指す生徒を受け入れるために実施しています。関西学院の建学の精神および教育理念を理解し、高等学校独自の特色を活かした優れた教育プログラムによって学んだ生徒を受け入れるものです。

審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

⑤ 協定校推薦入学

1) キリスト教学校校

関西学院大学協定校推薦入学は、高等学校のキリスト教主義教育により学び、個性的でかつ高い資質をもつ生徒を受け入れるために実施しています。関西学院の建学の精神および教育理念を理解し、高等学校独自の特色を活かした優れた教育プログラムによって学んだ生徒を受け入れるものです。

審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

2) グローバル校

関西学院大学協定校推薦入学は、個性的でかつ高い資質をもつ生徒を受け入れるために実施しています。21世紀的な教育目標であるグローバルな観点に立って国際社会に貢献できる人材として、関西学院の建学の精神および教育理念を理解し、高等学校独自の特色を活かした優れた教育プログラムによって学んだ生徒を受け入れるものです。

審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価し

ます。

3) グローバル+キリスト教校枠

関西学院大学協定校推薦入学は、21世紀的な教育目標であるグローバルな観点に立って国際社会に貢献できる人材として、高等学校のキリスト教主義教育により学び、个性的でかつ高い資質をもつ生徒を受け入れ、関西学院の建学の精神および教育理念を理解し、高等学校独自の特色を活かした優れた教育プログラムによって学んだ生徒をも受け入れるために実施するものです。

審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

⑥ 指定校推薦入学

指定校推薦入学は一定の学力を有する生徒を高等学校長の責任に基づく推薦を受け、書類審査・面接(口頭試問含む)によって総合的に評価し受け入れるための制度です。出願書類と面接(口頭試問含む)において、一定水準以上の「知識・技能」、各学部で学ぶために必要な「思考力・判断力・表現力」や「主体性・多様性・協働性」が備わっているか等を評価し、入学後の勉学における明確な志向および意欲の評価に重点を置き総合的に審査しています。

各学部において学ぶ意欲等を総合的に評価し受け入れるための制度です。

文学部

関西学院大学文学部において勉学することに強い意欲をもつ個性ゆたかな生徒を、推薦によって入学を許可することによって入学後の修学への準備期間を確保し、入学後に文学部においてその才能をさらに伸ばすとともに、本学部独自の学風を振興し、広く社会に寄与し得る人材を育成することを目的とします。審査では志願提出書類、面接における口頭試問を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

4. 探究評価型入学試験

関西学院大学のアドミッション・ポリシーに基づき、本入学試験では、横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を発見し、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を持ち、多様な人々と協働して学ぶことができる者を求めています。

第1次審査では、探究活動の成果物含む提出書類を審査し、主体性や協働性、課題発見・解決能力、また、本学で学ぶにふさわしい「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を評価します。

第2次審査では、学部毎に実施する面接(口頭試問含む)や探究活動に関するプレゼンテーション等で探究活動のプロセスや自己の成長、入学後の志望学部での学びの意欲や学びの計画などを評価します。

5. UNHCR 難民高等教育プログラムによる推薦入学

「UNHCR 難民高等教育プログラムによる推薦入学」は、関西学院大学と国連難民高等弁務官(UNHCR)駐日事務所および国連 UNHCR 協会との協定に基づき実施する入学制度です。これは本学の建学の精神に基づく「人類の幸福と平和に資する世界市民の育成」を現代に即したかたちで実現するためのものです。

日本で生活する難民の方々は、厳しい環境下におかれています。特に教育面では、本人や家族の経済的事情や、母国での出身校の卒業証明が得られないなどの理由で、高等教育を受ける機会を失っている場合が少なくありません。それが就労条件の悪化、さらには、経済的事情の悪化につながっています。

こうした状況を少しでも改善することを目的とするこの推薦入学制度で入学した生徒が、高い教養と専門性を身につけ、将来、日本、母国あるいは国際社会において平和の構築や社会の発展を支える人材へと成長することが期待されています。また関西学院大学で共に学ぶ他の学生にとっても、迫害や戦争といった国際社会が抱える問題を身近に捉えるとともに、日本国内の国際化を意識する機会となります。

国連難民高等弁務官(UNHCR)駐日事務所および国連 UNHCR 協会の推薦に基づき、面接(口頭試問含む)を行い本学で学ぶ意欲を中心にしながら「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」について評価を行います。

6. スポーツ選抜入学試験

関西学院大学のアドミッション・ポリシーに基づき、本入学試験では、スポーツ活動において優れた能力と競技実績を有し、入学後に学業とスポーツ活動を両立させる強い意欲をもつ者を積極的に受け入れ、本学における教育の活性化とスポーツ活動の一層の振興に寄与することを目指しています。

第1次審査では、書類審査にてスポーツ活動における実績を評価するとともに、筆記審査にて、本学で学ぶにあたっての基礎学力、知識、表現力、論理的思考力を評価します。

第2次審査では、学部毎に実施する面接(口頭試問含む)等により、志願する学部で学ぶ意欲を中心に評価を行います。

7. 外国人留学生入学試験

本学は、米国南メソジスト監督教会の宣教師、W. R. ランバースによって創設されました。開学当初から多くの外国人教員が教鞭をとっていたこともあり、外国人留学生を古くから受け入れ、日本の大学の中では国際色豊かな大学としてその学風を育んできました。

この入学試験制度は外国人留学生を対象とし、さまざまな国からの留学生を受け入れることにより、大学の国際性を一層高め、ひいてはキャンパスの活性化を図る教育的効果も期待した、いわゆる「多元的入試」の一環として実施されます。

出願時の提出書類に基づき審査を実施し、本学で学ぶにあたって必要な日本語力および、基礎学力を有しているかを審査した後、各学部が面接審査(口頭試問を含む)・筆記試験等を実施し、志願する学部で学ぶ意欲や人間性などを中心に評価し、出願時提出書類と合わせて総合的に判断し、選抜します。

8. 学部特色入学試験

関西学院大学のアドミッション・ポリシー、また、各学部が定めるアドミッション・ポリシーに基づき、各学部が求める多様な能力、様々な経験や活動を通じて身につけた豊かな人間性をもった学生を求めています。

文学部

関西学院大学文学部は、本学のスクールモットーである“Mastery for Service(奉仕のための練達)”の精神を踏まえ、人間の本質を追究するために深い学識と広い視野を養う学びの場です。文化や歴史、心理、文学や言語の教育研究を通じて、人間存在の営みの本質や現代的・普遍的な課題を追究します。

本学部では、このような考えに基づいて、学部特色入学試験を実施します。この入学試験では、英語4技能の検定試験のスコアを用いることで一般学力試験と同等レベルの知識や技能を評価するとともに、論述・小論文形式での筆記審査、面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力」「人間性」を多面的・多元的に評価し、本学部で学ぶにふさわしい意欲あふれる人を求めます。

教員組織の編制方針

人事委員会の機能を重視する。また現状を再検討し、課題があればそれを解決することに努め、年齢構成と男女比のバランスがとれた自由闊達で活気ある教員組織をめざす。

変更の有無

有・無

2. 実施計画

(1) 必須型

実施計画(タイトル)	1-(1)-① 「Kwansei コンピテンシー」の策定と運用			帳票の有無	不要
内容	<p>本大学は、大学として「学部の区別なく学生が共通に身に付けるべき知識・能力・資質」(「Kwansei コンピテンシー」)を時代に即して新たに定め、各学部はそれを土台に「各分野における学位授与に必要な知識・技能」であるDP(ディプロマポリシー)を再策定する。</p> <p>また、策定された「Kwansei コンピテンシー」を基に大学として「学部の区別なく学生が共通に身に付けるべき知識・能力・資質」の到達状況を測定、評価する取組を推進する。</p>				
学部独自の取り組み内容					
<指標 1>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	※学部における毎年度の本帳票の作成および学内各種会議体での点検・評価、改善活動などにより、内部質保証システムの PDCA サイクルを確立する。				
目標					
実績					
<指標 2>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標					
実績					
【進捗状況・今後の取り組み】					

実施計画(タイトル)	1-(1)-② 三つのポリシーに基づく教学マネジメントの推進(3ポリシーの見直し・検証、カリキュラム見直し・拡充、カリキュラムマップの整備)			帳票の有無	不要
内容	<p>本学は、大学として「学部の区別なく学生が共通に身に付けるべき知識・能力・資質」(「Kwansei コンピテンシー」)を時代に即して新たに定め、各学部・研究科はそれを土台に「各分野における学位授与に必要な知識・技能」であるDP(ディプロマポリシー)を策定する。このDPは、すべての学生が卒業/修了必要単位数を取得した段階で修得しているべき学修成果を表したものである。この基本原理を守るべく、学部・研究科は(a)DPの再確認(b)DPとCP(カリキュラムポリシー)の整合(c)シラバスの実質化(d)シラバスに沿った成績評価(e)DPとAP(アドミッションポリシー)の連動、を厳格に運用する。</p> <p>本学はこうした学部/研究科による三つのポリシーに基づく教学マネジメントを統括し、大学全体の内部質保証を推進することで、卒業する全ての学生の質を保証する。</p>				
学部独自の取り組み内容	3学科11専修に分かれ、各学科および各専修が特色ある教育を行っている文学部においては、全体の整合性と個々の適合性を同時に検証していく必要があり、各学科および各専修の見解を統合していくことが求められる。				
<指標1>	文学部のDP・CPが関西学院大学のKwansei コンピテンシーに適合しているかどうかの検証				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標	文学部のDP・CPの記そのものの検証	文学部のDP・CPがKwansei コンピテンシーに合致しているかどうかの検証	前年に引き続き、文学部のDP・CPがKwansei コンピテンシーに合致しているかどうかの検証	前年に引き続き、文学部のDP・CPがKwansei コンピテンシーに合致しているかどうかの検証	
実績	2020年10月教授会にて検証を行った結果、適合していると判断した。	2021年10月教授会にて検証を行った結果、適合していると判断した。	2022年10月教授会にて検証を行った結果、適合していると判断した。	2024年1月教授会にて検証を行った結果、適合していると判断した。	
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	Kwansei コンピテンシーに合わせて文学部DP・CPの改訂を検討	前年に引き続き、Kwansei コンピテンシーに合わせて文学部DP・CPの改訂を検討	Kwansei コンピテンシーとのより高度の適合性を持つ文学部DP・CPの改訂	前年に改訂した文学部のDP・CPの検証	
実績					
<指標2>	文学部のDP・CPが各学科および各専修の教育内容に合致しているかどうかの検証				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標	文学部のDP・CPの記述そのものの検証	文学部のDP・CPが各学科および各専修の教育内容に合致しているかどうかの検証	前年に引き続き、文学部のDP・CPが各学科および各専修の教育内容に合致しているかどうかの検証	前年に引き続き、文学部のDP・CPが各学科および各専修の教育内容に合致しているかどうかの検証	
実績	2020年10月教授会にて検証を行った結果、合致していると判断した。新型コロナウイルス感染症下の特殊状況においても有効であることが確認された。	2021年10月教授会にて検証を行った結果、合致していると判断した。昨年に引き続き新型コロナウイルス感染症下の特殊状況においても有効であることが確認された。	2022年10月教授会にて検証を行った結果、合致していると判断した。	2024年1月教授会にて検証を行った結果、適合していると判断した。	
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	各学科および各専修の教育内容に合わせて文学部のDP・CPの改訂を検討	前年に引き続き、各学科および各専修の教育内容に合わせて文学部のDP・CPの改訂を検討	各学科および各専修の教育内容とのより高度の適合性を持つ文学部のDP・CPの改訂	前年に改訂した文学部のDP・CPの検証	
実績					
<p>【2023年度の進捗状況・今後の取り組み】</p> <p>文学部では、2022年度、執行部会および10月教授会において、文学部のDP・CPが関西学院大学のKwansei コンピテンシーに適合しているかどうかという観点、および文学部のDP・CPが各学科および各専修の教育内容に合致しているかどうかという観点から、文学部のDP・CPの記述そのものの妥当性を検証した。それぞれの記述に関しては不適当な箇所がないことを確認したほか、昨年に引き続き新型コロナウイルス感染症下という特殊状況においてもなお、これらのポリシーが有効であることも立証された。今後もポストコロナにむけてオンライン授業の一部取り入れが常態化すると予想されるが、これらのポリシーが妥当であるかどうかについて、慎重な検討を続けていくことが求められる。</p>					

実施計画(タイトル)	1-(9)-① 入試制度改革への対応			帳票の有無	不要
内容	<p>グローバル化や情報化の進展、少子高齢社会の到来など社会の在り方が急速に変わり、予測が難しい状況の中で、自ら問題を発見し、他者と協力して解決していくための力が必要とされており、2015年1月に文部科学省より「高大接続改革実行プラン」が発表され、高大接続改革は、「高校教育」「大学教育」そしてそれをつなぐ「大学入学者選抜」の一体的な改革で、それぞれについて様々な施策が進んでいる。「大学入学者選抜改革」においては、これまで以上に多面的・総合的に人物を評価する入試への転換を掲げ、大学入試センター試験を廃止し、思考力・判断力・表現力を一層重視した「大学入学共通テスト」を2020年度(2021年1月実施)より導入。大学入学共通テストでは、国語と数学に記述式問題を導入すること、英語については4技能を適切に評価するため民間の資格・検定試験を活用することが決まっている。また、各大学の個別選抜では、アドミッション・ポリシーの明確化とともに、より多面的な選抜方法にすることが求められている。一方、AO入試や推薦入試では、一部で「学力不問になっている」といった批判があることから、小論文やプレゼンテーション、大学入学共通テストなどを通じて、学力を問う試験を必須化する方針も示されている。</p> <p>このような状況において、本学においては学長が入試委員長として全学部長が入試委員となる入試委員会が中心となり、以下のような入試制度改革を進めていく。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 高大接続改革で求められる入試制度改革への対応 上記の改革を進めるため、本学ではすべての入試において「学力3要素」を評価する入試へと変えていく。また、SGUでもある本学においてはすべての入試において英語の4技能を評価する入試へと変えていく。合わせて、各種入試においても、現行やや一芸入試的な色合いの濃いAO入試においては高等学校での活動をしっかりと評価する入試への変更を、そして、現行SGH・SSH指定校に限定している公募推薦入試も課題研究を実践しているすべての高等学校に拡大し、高等学校での探究活動を評価する入試へと変更させていく。 2. 現行入試制度・募集人員の再検討 上記のような国の高大接続改革が進むと、例えば、国公立大学ではAO入試の割合が増加する。また、18歳人口の減少という人口構造の変化(少子化)により、より一層前倒し(各種入試への定員のシフト)によって学生を確保する必要が生じる。今後、各種入試と一般入試の定員比率の再検討とともに、各種入試の定員の見直しを進める必要がある。 3. 主体性等を評価するための入試体制強化やアドミッションオフィサー配置 上記のとおり、今後の大学入試においては、学力3要素を評価するため、小論文やプレゼンテーション、課題研究論文、面接や調査書など高等学校への学びをひとりひとり丁寧に評価する入試が拡大してくる。それに伴って当然、これまで入試選抜を担ってこられた教員だけでは対応することが困難となる。そのため、職員からも提出書類の評価を行うアドミッションオフィサーを配置することが求められる。今後、アドミッションオフィサーへの入試評価業務の委嘱を進めていく。 				
学部独自の取り組み内容	<p>文学部では入試制度検討小委員会を適宜開催し、各種入試の実施方法や問題点について検討を重ねながら多様かつ適切な入試形態を採用し、一定の学力レベルを有する多才な人材を集めるよう努力している。各種入試については、入学センターが提案した各種入試統廃合(2023年度入試～)より、文学部では学部特色入試、グローバル入試(帰国生徒入試含)、探求評価型入試、スポーツ選抜入試を実施する。なお、11専修を抱える本学部では、たとえば指定校推薦入学においては対象となる高等学校に対してローテーション方式で専修枠を提供し、機会の平等を図っている。指定校推薦入学者に対しては成績調査を毎年おこない、成績不振者の出身高等学校に対しては適切な学力の者を推薦するよう警告文を送付している。その後の入学者に対する調査によって事態の改善が図られなかったことが判明した場合には、当該高等学校の推薦枠を削減する。こうした取り組みによって本学部の入学者の学力レベルを維持している。</p>				
<指標1>	入試制度検討小委員会の開催による入試制度の検討				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標	新制度の検討		新制度の検討		新制度の検討
実績	今年度には入試制度検討小委員会を2回開催し、新たに導入された総合選抜入試の実施を含め、適切な入試を実施するよう検討を重ねた。	今年度には入試制度検討小委員会を開催し、新たに導入された学部特色入試の実施を含め、適切な入試を実施するよう検討を重ねた。	入試制度検討小委員会を開催し、昨年度導入された学部特色入試の入試形態・実施方法を含め、新しく2回行われることとなった学部個別入試の配点など、入試を適切に実施するよう検討を重ねた。	今年度は入試制度検討小委員会を2回開催し、2025年度から3月実施の共通テスト利用3科目型入試について導入すること、および科目や配点について検討を重ねた。	
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	新制度の継続に関する検討		次なる制度の検討		次なる制度の検討
実績					
<指標2>	指定校推薦入学グループローテーションおよびその継続をめぐる検討				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標	ローテーションに関する検討		ローテーションに関する検討		ローテーションに関する検討
実績	非公開		非公開		非公開
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	ローテーションおよびその継続に関する検討	ローテーションおよびその継続に関する検討	ローテーションないし新方式に関する検討	ローテーションないし新方式に関する検討	
実績					
<p>【2023年度の進捗状況・今後の取り組み】 今年度行った各種入試については、面接試験を対面形式に戻して実施したが、Zoomを利用した面接や、必要に応じて個別面接を行うなど、状況に応じて適切な対応を文学部として行ってきた。その他、各種入試での面接方法の統一、合否判断基準の明確化、書類の書式の見直しなど、合理性を考慮しつつ諸制度の変更について、継続的に検討を重ねている。受験者数のみならず、文学部の学びに相応しい学生の確保につなげる方策について鋭意検討中である。</p>					

実施計画(タイトル)	1-(12)-⑧ シラバスの実質化			帳票の有無	不要
内容	組織的な教育力を向上するため、三つのポリシーに基づく教学マネジメントを推進することが中心的な課題であり、そのための重点戦略としてシラバスの精緻化から取り組む。特に「授業目的」と「到達目標」を明確にすることで、カリキュラム全体の中での科目の位置づけや他の科目との比較が可能になり、科目間の相互関係を整理する契機となる。それによって CP や DP の適切性・妥当性といった上流に遡ることが可能となる。また、シラバスの精緻化は、授業外学修時間の増加につながる。				
学部独自の取り組み内容	文学部では、シラバスの充実を図るとともに、3 学科 11 専修にわたるその広範で複雑なシラバスの質を担保するために、シラバス記述内容のモデルの作成を検討している。				
<指標 1>	シラバス記述内容のモデルの作成				
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標	英文記述項目に関する記述内容のモデルの作成	前年に作成した英文記述項目に関する記述内容のモデルの適切性の検証およびその改訂	前年に作成した英文記述項目に関する記述内容のモデルの適切性の検証およびその改訂	前年に作成した英文記述項目に関する記述内容のモデルの適切性の検証およびその改訂	
実績	必ずしも英語を得意としない教員に便宜を図るために 2019 年度に暫定的に作成した文学部独自のシラバス英文記述の文例を見直し、シラバス英文記述項目のモデル文として授業担当者に配布した。	前年作成の英文記述項目について再改訂の必要性を検討した上でモデル文として授業担当者に配布した。	前年度手直しを加えた英文記述項目について再度チェックを施した上でモデルとして授業に配布した。	前年度手直しを加えた英文記述項目について再度チェックを施した上でモデルとして授業に配布した。	
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標	前年に作成した英文記述項目に関する記述内容のモデルの適切性の検証およびその改訂	前年に作成した英文記述項目に関する記述内容のモデルの適切性の検証およびその改訂	前年に作成した英文記述項目に関する記述内容のモデルの完成	前年に完成させた英文記述項目に関する記述内容のモデルの検証	
実績					
<指標 2>	シラバス記述内容の充実化				
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標	英文記述項目以外の記述内容の検証	英文記述項目以外の記述内容の充実化の検討	前年に引き続き、英文記述項目以外の記述内容の充実化の検討	前年に引き続き、英文記述項目以外の記述内容の充実化の検討	
実績	今年度シラバスに関しては、学期を通じて授業の実態に合わせて記述を改訂するよう授業担当者に指示した。次年度シラバスに関しては、授業形態やフィードバック方法につき記述を追加するよう授業担当者に指示した。	コロナの感染状況の変化により開講形態が変更される可能性を教員に伝え、それに向けてシラバスに記載すべき内容を具体的に伝達した。	前年度と同じく、コロナの感染状況の変化により開講形態が変更される可能性を教員に伝え、それに向けてシラバスに記載すべき内容を具体的に伝達した。	新型コロナウイルス感染症対応の停止に伴い、シラバスに記載すべき内容を変更し、教員に対して具体的な変更点について伝達した。	
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標	前年に引き続き、英文記述項目以外の記述内容の充実化の検討	前年に引き続き、英文記述項目以外の記述内容の充実化の検討	英文記述項目以外の記述内容の充実化の完成	前年に完成させた英文記述項目以外の記述内容の充実化の検証	
実績					
<p>【2023 年度の進捗状況・今後の取り組み】</p> <p>文学部では 2019 年度に独自でシラバスの英文記述項目につき参考となる文例を暫定的に作成していたが、それを見直して文学部のシラバス英文記述項目モデル文として授業担当者に配布している。次年度のシラバス作成に向けては、コロナ状況に応じてシラバスの変更を想定するであろう教務機構の方針に沿いつつ、文学部に適応した補足説明文書を作成し、授業担当者、学生ができるだけ混乱しないよう対策を講じる。</p>					

実施計画(タイトル)	1-(13)-② 教職協働によるアカデミックアドバイスの仕組み確立			帳票の有無	不要
内容	<p>教職協働によるアカデミックアドバイスの仕組みを確立し、学生の学びをサポートし、残留生、退学者をださないキャンパスを目指す。アカデミックアドバイザー制度は実施から4年がたち、現在行われている対象学生の見直しなどの検討も必要となっている。</p> <p>— 以下、SGU時の文章 —</p> <p>本学では、従来から成績不振者へのサポートを目的とした様々な指導を学部ごとに実施してきたが、GPAのさらなる活用と学生に対してより適切かつ高度な学修支援を行うという観点から、2015年度より「アカデミックアドバイザー制度」を全学的な仕組みとして導入する。</p> <p>アカデミックアドバイザーは、学部ごとに人数を定め、学部所属の専任教員から選出するものとする。各学部は修得単位数、GPA、出席状況のいずれか、もしくは複数を用いて指導対象となる学生の基準を定める。指導対象学生に対しては、アカデミックアドバイザーが個別面談および学修指導等の修学上の支援を行う。</p> <p>制度導入後は、教育力向上(ファカルティ・ディベロップメント)部会において本制度の運用状況に関する情報共有を行い、より一層の改善等に取り組む予定である。</p>				
学部独自の取り組み内容	<p>文学部では、全学的なアカデミック・アドバイザー制度導入以前から、学習困難者への指導・支援を行ってきており、その実績に基づいたきめ細やかな指導を行っている。今後はその質をより高める努力を行う。</p>				
<指標 1>	アカデミック・アドバイス実施の徹底				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標	アカデミック・アドバイス対象者の本制度活用について検証	アカデミック・アドバイス対象者への適切な連絡・指導方法の検討	前年に引き続き、アカデミック・アドバイザー対象者への適切な連絡・指導方法の検討	前年に引き続き、アカデミック・アドバイザー対象者への適切な連絡・指導方法の検討	
実績	新型コロナウイルス感染症の影響により対面面談が困難なため実施しなかったが、特にオンライン授業への対応が遅れて授業への出席・参加率が悪い学生には個別に相談に乗り授業からの脱落を防ぐ努力をした。	新型コロナウイルス感染症の対策として、呼び出した学生の希望に応じて対面とオンラインで面談を実施した。オンライン授業に慣れられず成績不振となった学生には個別に相談に乗り、課題管理の方法など助言した。	新型コロナウイルス感染症の感染状況が改善したため、全て対面で面談を実施した。学習へのモチベーションを持っていない学生や、授業課題の管理ができない学生に、教員とのコミュニケーション方法など助言した。	前年度に引き続き、全て対面で面談を実施した。学習へのモチベーションを持っていない学生や、授業課題の管理ができない学生に、教員とのコミュニケーション方法など助言した。	
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	前年に引き続き、アカデミック・アドバイザー対象者への適切な連絡・指導方法の検討	前年に引き続き、アカデミック・アドバイザー対象者への適切な連絡・指導方法の検討	アカデミック・アドバイザー対象者への適切な連絡・指導方法の確立	前年に確立したアカデミック・アドバイザー対象者への適切な連絡・指導方法の検証	
実績					
<指標 2>	アカデミック・アドバイス実績の蓄積とその活用				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標	アカデミック・アドバイザー制度スタート以降の実績を検証	アカデミック・アドバイス実績の活用方法について検討	前年に引き続き、アカデミック・アドバイザー実績の活用方法について検討	前年に引き続き、アカデミック・アドバイザー実績の活用方法について検討	
実績	面談者数は2017年以降、毎年対象者75名に対し30件前後で推移。面談者の成績上昇率平均71%。面談効果はでている。	今年度は、春・秋学期2回実施し、合計対象者119名のうち面談者数は86名となった。春学期面談者の成績上昇率は約63%であったが、面談率が約72%に上昇しており、面談のニーズは高い。	今年度は春・秋学期2回実施し、合計対象者161名のうち面談者数は92名となった。春学期面談者の成績上昇率は約80%(成績上昇者:43名/54名)面談率は、春・秋学期ともに約57%を維持している	前年度と同様に、春・秋学期2回実施し、合計対象者120名のうち面談者数は56名となった(面談率は、春・秋学期併せて約47%)。春学期面談者の成績上昇率は約64%(成績上昇者:34名/53名)であった。	
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	前年に引き続き、アカデミック・アドバイザー実績の活用方法について検討	前年に引き続き、アカデミック・アドバイザー実績の活用方法について検討	アカデミック・アドバイザー実績の活用方法の確立	前年に確立されたアカデミック・アドバイザー実績の活用方法について検討	
実績					
<p>【2023年度の進捗状況・今後の取り組み】</p> <p>2022年度は、新型コロナウイルス感染症の感染状況がさらに改善したため、全面的に対面で面談を行った。この二年間のオンライン授業に慣れた学生が、はじめてないし改めて大学に登校して対面授業に出席するなかで、生活リズムを含めた学習全般へのモチベーション維持や、教室内の直接のやり取りによる課題管理などで困難に直面するケースがよく見られた。そのため、授業担当教員とのコミュニケーションの取り方について助言することが求められた。</p>					

実施計画(タイトル)	1-(13)-③ TA・LA・SAの活用推進			帳票の有無	要
内容	<p>LA の配置により、授業での教育支援(教員への支援を含む)、授業外での学修支援を強化する。初年次教育である導入科目等を対象としたLAについては制度開始から7年がたち、今後の在り方は新たなライティングサポート制度と合わせて考えていく。</p> <p>SA については、特に全学科目情報科学科目の現状の課題を抽出し、現状のままか、外部委託するかを検討する。</p> <p>TA について各学部では、①大学院生の減少で確保が難しい、②大学院生全員にあたらぬ、③月額報酬の場合、報酬に対して実働が少ない、人によって実働に差が生じる、④確保したいが他研究科生を重複採用できない、などの課題があり、①業務実働に合わせた報酬制度、②他研究科生の重複採用、③外部委託、などを検討することが考えられる。</p>				
学部独自の取り組み内容	<p>文学部では、2019 年度現在、TA と LA に関しては複数の専修で多数の活用実績を持っているが、SA に関しては活用実績を持たない。TA、LA、SA の特性を見極めて適切な運用を図っていくことが求められる。</p>				
<指標 1>	TA および LA の活用の検証と促進				
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標	TA および LA 活用実態に関する検証	前年に引き続き、TA および LA 活用実態に関する検証	これまでの TA および LA 活用実態を踏まえて今後の TA および LA 活用方法の検討	前年に引き続き、これまでの TA および LA 活用実態を踏まえて今後の TA および LA 活用方法の検討	
実績	新型コロナウイルス感染症の影響により、TA と LA については通常と異なる活用を余儀なくされた。オンライン授業への補助など、新しい活用方法が浮上した。	昨年同様、新型コロナウイルスの影響で通常とは異なる活用を余儀なくされた。オンライン授業への補助で TA を活用した。	TA はオンライン授業がなくなったので、通常の授業補助に戻った。LA は外国人留学生へのサポートがコロナ下では中止になっていたが、来年度から再開予定。	TA については、前年度に引き続き通常の授業補助に従事し、問題なく機能していた。LA については、語学授業に対応する枠を増やした。	
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標	前年に引き続き、これまでの TA および LA 活用実態を踏まえて今後の TA および LA 活用方法の検討	前年に引き続き、これまでの TA および LA 活用実態を踏まえて今後の TA および LA 活用方法の検討	これまでの検討を踏まえた適切な TA および LA 活用方法の促進	これまでの検討を踏まえた適切な TA および LA 活用方法の促進	
実績					
<指標 2>	SA の活用の検討				
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標	SA の特性の見極め	前年に引き続き、SA の特性の見極め	SA の特性を見極めたうえでその活用方法の検討	前年に引き続き、SA の特性を見極めたうえでその活用方法の検討	
実績	新型コロナウイルス感染症の影響により、SA を活用する方法を新規に考える余裕はなかった。一方で、学部の運営に新たな問題がいろいろ生じており、そのうちどれが SA によって解決可能か検討を始めた。	対面授業が行われなかったため、SA を活用する十分な検討は行われなかった。新たな問題として、ポストコロナ時代に対応する SA の活用方法が浮上した。	予算の問題があり、SA についての検討は進んでいない。	語学授業対応の LA を増枠したこともあり、前年度と同様予算上の問題から、SA の検討については進んでいない。	
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標	SA の適切な活用の促進	前年に引き続き、SA の適切な活用の促進	SA の活用実態の検証	前年に引き続き、SA の活用実態の検証	
実績					
<p>【2023 年度の進捗状況・今後の取り組み】</p> <p>文学部では、2022 年度現在、各研究室付きの TA を 21 名、授業張付けの教育補助の TA を 19 名活用している。また、授業等のサポートのための LA を延べ 37 名活用している。</p> <p>例年語学等学習のサポートのための LA を延べ 16 名ほど活用しているが 2022 年度は 2021 年度に引き続きコロナの影響で採用をストップしている。SA に関しては、2022 年度現在、活用の実態はないので、SA そのものが必要かどうかも含めて検討を進める。</p>					

実施計画(タイトル)	8-(2)-① KGI・KPIの設定・活用			帳票の有無	不要
内容	非営利組織である学校のマネジメントにおける最大の課題の一つは、最上位のアウトカム(成果)を定め、その達成度を測るKGIやKPIを設定することにある。学院ではKPIダッシュボード等のツールを活用して「Kwansei Grand Challenge 2039」(超長期ビジョン・長期戦略)および中期総合経営計画(実施計画・基盤計画)の進捗や達成度を含めた成果を検証する仕組みを構築する。そのために、教学・経営両面のデータ活用を司るのに最適な組織体制を確立する。また、各学校および大学の各学部も、全学のKPIと連動しながら個別の状況に合わせて独自にKPIを設定し、毎年その数値や取組状況を評価し、改善・促進の取り組みに活用する。				
学部独自の取り組み内容					
<指標 1>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	※本帳票の末尾において、学修成果を測定する学部独自のKGI・KPIを策定しており、これらの指標を用いて毎年度学部における実施計画・全体の取組みの評価を行っている。				
目標					
実績					
<指標 2>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標					
実績					
【進捗状況・今後の取り組み】					

実施計画(タイトル)	8-(10)-① 内部質保証体制の確立と運用			帳票の有無	要
内容	<p>本学には、従来から二つの大きなPDCAサイクルが存在していた。一つは中期計画(含む)であり、もう一つは大学の自己点検・評価および各学校の学校評価である。両者はそれぞれの目的体系を持ちながら重複する部分が多く、業務負担の軽減の観点からも、共通の目的・目標の下で学院・大学全体を見渡した統合的なPDCAサイクルの確立が必須となっている。</p> <p>このため、本学では、2019年度から各学部／研究科、短期大学・各学校が本格的に取組を開始する「中期総合経営計画」において、その取組の成果を定期的に測定、評価、改善することを通じて、効率的・効果的なマネジメントの実現を図る。</p>				
学部独自の取り組み内容					
<指標 1>					
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	※2020年度入学生より、「Kwansei コンピテンシー」を獲得することを念頭に置く旨を、各学部のディプロマ・ポリシー(DP)に追記済。				
目標					
実績					
<指標 2>					
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標					
実績					
【進捗状況・今後の取り組み】					

(2) 選択型

実施計画(タイトル)	1-(11)-② 学部におけるハンズオン・ラーニングプログラムの推進			帳票の有無	要
内容	SGU ダブルチャレンジ制度では、アウェイチャレンジ(①国際プログラム、②ハンズオン・ラーニングプログラム、③副専攻プログラム)の単位を修得して卒業する学生数(実数)を指標としており、SGU最終年度の2023年度においては5700名を目標数値としている。その5700名のうち約3000名が②ハンズオン・ラーニングプログラムの単位を修得することがもう一つの目標値である。目標である3000人を達成するためには、ハンズオン・ラーニングセンター開講科目の単位修得者数を増加させることはもちろんではあるが、学部におけるハンズオン・ラーニングを推進し、学部開講ハンズオン・ラーニングプログラム単位修得者数の増加を図らなければならない。				
学部独自の取り組み内容	文学部では、3学科からそれぞれハンズオン・ラーニング・プログラムを提供している。				
<指標1>	ハンズオン・ラーニング科目の検証				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標	各学科提供のハンズオン・ラーニング科目の検証	前年に引き続き、各学科提供のハンズオン・ラーニング科目の検証	各学科提供のハンズオン・ラーニング科目の見直し	前年に引き続き、各学科提供のハンズオン・ラーニング科目の見直し	
実績	当初、3学科にそれぞれハンズオン・ラーニング科目を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の影響により、一部で不開講を余儀なくされた。実施できた科目については、安全対策など今後の参考になる成果をもたらした。	3学科で計8つのハンズオン・ラーニング科目を開講し、コロナ禍でありながら安全に十分注意して実施することができた。科目によっては、一部内容を変更するなどの対処が必要な場合もあったが、今後の実施計画のための貴重な成果を得た。	3学科で計8つのハンズオン・ラーニング科目を開講し、学生は準備段階から意欲的に取り組んだ。「エクスカッション」は新聞の取材を受け、記事が掲載された。11専修中の4専修が実施したが、今後は他専修でも実施の可能性を探りたい。	3学科で計8つのハンズオン・ラーニング科目を開講した。これらを履修した学生は積極的に課題に取り組んだ。11専修中の4専修が科目を開講したが、他の専修でも実施の検討をしていく。	
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	各学科提供のハンズオン・ラーニング科目の見直し	各学科提供のハンズオン・ラーニング科目の見直し	各学科提供のハンズオン・ラーニング科目の見直し	各学科提供のハンズオン・ラーニング科目の見直し	
実績					
<指標2>	ハンズオン・ラーニング科目の学生への推奨				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標	ハンズオン・ラーニング科目の学生への周知方法について検証	前年に引き続き、ハンズオン・ラーニング科目の学生への周知方法について検証	ハンズオン・ラーニング科目の学生への周知方法について検討	前年に引き続き、ハンズオン・ラーニング科目の学生への周知方法について検討	
実績	新入生オリエンテーションが短縮して行われ、また予定科目が専修限定クラスであったため、例年行っているオリエンテーションでの周知を見合せた。特殊状況下での周知方法の課題が浮き彫りになった。	学生への周知は、入学時のオリエンテーションに大きく依存している。オリエンテーションが短縮して行われたため、特殊状況下での周知方法については、さらに検討の余地があることがわかった。	入学時のオリエンテーションのほか、随時情報は提供しているが、科目によっては不十分であったかもしれない。	入学時のオリエンテーションのほか、随時情報は提供している。引き続き、効果的な周知方法について検討していく。	
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	前年に引き続き、ハンズオン・ラーニング科目の学生への周知方法について検討	前年に引き続き、ハンズオン・ラーニング科目の学生への周知方法について検討	ハンズオン・ラーニング科目の学生への周知方法を確立	前年に確立したハンズオン・ラーニング科目の学生への周知方法について検証	
実績					
【2023年度の進捗状況・今後の取り組み】 文学部では、3学科がそれぞれにハンズオン・ラーニング科目を提供している。4専修が実施したが、それぞれ教育内容にふさわしい授業が展開されており、学生は準備段階から意欲的に取り組み、現地での実習を終えている。特にエクスカッションでは現地の地方新聞からの取材を受け、掲載された。 現在11専修中4専修しか実施していないため、今後は実施していない専修にもハンズオン・ラーニングプログラムを実施できないか検討を継続していく。					

3. 文学部のKPI

(1) 学修成果に関するKPI

KPI	定義	基準	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
DPIに定める資質・能力の獲得状況	あなたはこの授業を通して卒業までに求められる資質・能力を向上できたと思いますか。(「そう思う」～「そう思わない」の5段階評価) 「学修行動と授業に関する調査」	5段階評価のうち、上位2つ (A「そう思う」、B「どちらかといえばそう思う」)の回答割合(%)	非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
Kwansei コンピテンシー獲得状況	知識・能力・資質の程度 全項目 (「大変身について」～「全く身についていない」の5段階評価) (2018～2022年度) 当該年度卒業生と次年度1年生との調査による伸び (2023～2027年度) 当該年度卒業生とその1年生時との調査による伸び 「IR 新入生調査」「IR 卒業時調査」	5段階評価のうち、上位2つ (「大変身について」「やや身についていた」)の回答割合(%)の平均の差 (2022年度以降のデータの変更点年度以降) ➡入学時と卒業時のアンケート調査においてコンピテンシーの10要素の総合得点(50点満点)を確認して、学部ごとにその差の平均を算出する。	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
汎用的能力の獲得状況	入学後の能力変化(表外※参照) (「大きく増えた」～「大きく減った」の5段階評価) 「IR 上級生調査」	5段階評価のうち、上位2つ (A「大きく増えた」、B「増えた」)の回答割合(%) ➡2022年度の調査見直しにより、当該項目は調査項目から削除。(Kwansei コンピテンシーとの重複)	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2024年度	2026年度	2027年度
授業外学修時間	授業外時間に、授業課題や準備時間、復習をする時間(一週当たりの平均) 「IR1年生調査、IR 上級生調査」 ➡【2022年度データの変更点】2022年度実施分から調査名称を「学生調査」に変更。	一週あたり6時間以上の割合 ➡【2022年度データの変更点】学生調査の変更に伴い、2022年度以降は「一週あたり5時間以上」の割合に変更。	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2024年度	2026年度	2027年度
授業目的・到達目標の達成度	あなたは、シラバスに示された授業の目的や、到達目標を達成できると思いますか。(「そう思う」～「そう思わない」の5段階評価) 「学修行動と授業に関する調査」	5段階評価のうち、A「そう思う」、B「どちらかという」という回答割合(%)	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2024年度	2026年度	2027年度
授業満足度	あなたは、全体としてこの授業に満足していますか。(「そう思う」～「そう思わない」の5段階評価) 「学修行動と授業に関する調査」	5段階評価のうち、A「そう思う」、B「どちらかという」という回答割合(%)	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
留学等派遣数	協定校への派遣学生数 「国際連携機構資料」	大学間協定に基づく派遣日本人学生数	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
TOEIC/TOEFL等の英語運用能力	SGUの取組みで確認している TOEFL 換算得点目標の達成人数 <参考(学部別目標値)> ■国際: TOEFL 換算 550点 ■文・総政: TOEFL 換算 540点 ■その他: TOEFL 換算 520点 「SGUに関する調査」	左記「TOEFL 換算得点」目標の達成人数(人)	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
学生生活満足度	大学生活を振り返って、学生生活は満足したものですか。(「満足」～「不満」の5段階評価) 「IR 卒業1年目調査」	5段階評価のうち、上位2つ (A「満足」、B「そこそこ満足」)の回答割合(%) *2018年度調査までは、A「とても満足」、B「満足」と回答した比率	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
就職率	就職率 「キャリアセンター統計資料」	就職者数(自営含まず)/就職希望者数	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
大学院進学率	大学院進学率 「キャリアセンター統計資料」	大学院進学者数/学部卒業生数	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開

(※)「知識・技能・能力の獲得状況」の「知識・技能・能力」とは、一般的な教養、論理的思考力、専門分野や学科の知識、グローバルな問題の理解、多様性を尊重する力、主体的に行動する力、リーダーシップ力、人間関係を構築する力、対立する価値を調整する力、地域社会が直面する問題を理解する能力、国民が直面する問題を理解する能力、困難を乗り越える粘り強さ、文章表現の能力、外国語の運用能力、生涯にわたって学び続ける能力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、数理的な能力、コンピュータの操作能力、誠実さと品位、時間を効果的に利用する能力、卒業後に就職するための準備の程度、を指す

(2) 学部独自KPI

KPI	定義	基準	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
ライティング・センター活用率	ライティング・センター活用率	ライティング・センター活用者数 / 文学部学生数	非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
文学部内副専攻制の登録率	文学部内副専攻制の登録率	文学部内副専攻制登録者数 / 文学部学生数	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開

(3) 学院全体のKPIに関する指標

KPI	定義	基準	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
入試難易度 (偏差値)	ベネッセの進研模試のデータにおける合格可能性 60%以上となる偏差値 高大接続センター		非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
同系列学部勝敗	ベネッセの進研模試のデータにおける同系列学部合格者の競合大学(同志社、立命館、関西)との入学比率 総合企画部	本学と相手校の両方に合格していずれかに入学した受験生のうち、本学に入学した者の比率 本学入学者数 / (本学入学者数 + 併願校入学者) (%)	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
外国人留学者数	外国人留学生 CIEC 年次報告書	詳細は SGU の定義に準拠	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
ダブルチャレンジ派遣者数	当該年度の卒業生のうち、ダブルチャレンジ制度のアウェイチャレンジの単位を取得して卒業した学生数 グローバル化推進本部	①インターナショナルプログラム②ハンズオン・ラーニング・プログラム③副専攻プログラムのいずれかで単位取得し卒業した学生数 ※学部毎は延べ人数	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
卒業後の進路の満足度	卒業後の進路の満足度 (「満足」～「不満」の5段階評価) 卒業時調査	5段階評価のうち「満足」と回答した比率 (%)	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
スクールモットーの浸透度	スクールモットー“Mastery for Service”を普段意識する程度は (「常に行動の規範としている」～「全く意識しない」の5段階評価) IR 卒業生調査	5段階評価のうち、A「常に行動の規範としている」または B「ときどき意識している」と回答した割合 (%) * 2018 年度調査までは A「常に行動の規範としている」または B「頻繁に意識している」と回答した比率	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
Well-being 度	現在の自分を取り巻く環境(特定 7 項目)に対して、あなたはどのように感じますか。(「そう思う」～「そう思わない」の 4 段階評価) IR 卒業生調査	「E 時折、収入面が不安になることがある」を除く7項目に対して A「そう思う」、B「どちらかといえばそう思う」と回答した割合の平均値	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開

文学部実施計画・全体評価

DP に定める資質・能力の獲得状況については、顕著な数値の上昇が見られる。Kwansei コンピテンシー獲得状況に関しては算出基準が変わったため、前年度までの傾向との比較はできないのだが、2020 年度と 2021 年度の推移から予想されるのは、この能力の獲得の割合がさらに上昇しているということである。授業外学修時間については、この項目も 2022 年度から変更されそれまでの 1 週当たり 6 時間の学修時間から 5 時間へと基準が下げられたにも関わらず、1 年生では減少が見られる。特に 1・2 年次に授業外学修の時間が多く求められる外国語科目において、オンライン授業では授業外に回されていた予習・復習などが、対面授業の授業内に取り込まれたことが要因として挙げられるのではないかと考えられる。一方上級生の授業外学修時間の増加については、演習科目における発表準備など、専門科目の授業で求められる事前・事後の準備が、対面授業においては増加したものと予想される。授業目的・到達目標の達成度に関しては、2022 年度までの 5 年間大きな変動はなく、一定の水準を維持しているものと考えられる。授業満足に関しては、2022 年度は微増となった。入学時から対面授業を受講している学生が増えるにつれて 2019 年度あたりの傾向に戻っていくのではないだろうか。

昨年度の評価に記載されていた「1、2 年次教育ワーキンググループ」は、2023 年度の現執行部からはこれをさらに発展させる形で、情報処理基礎科目の検討と人文演習の検討をそれぞれメインとする 2 つのワーキンググループに分割し、これをカリキュラム委員会の元に置いて具体的な検討を進めている。

2023 年度には文学部独自の 6 つの留学プログラムを実施し、計 187 名(オンライン実施、及び予定も含む)の学生をイギリス、ドイツ、フランス、韓国に派遣した。参加学生の満足度と教育的効果がきわめて高いことがわかったので、次年度以降も継続する予定である。

【文学研究科】中期計画総括シート



提出日：2024年1月24日

責任者	文学研究科 委員長	担当部局	文学研究科
-----	--------------	------	-------

1. 文学研究科の理念、目的、各種方針

文学研究科の理念	変更の有無
文学研究科がその理念の中心に掲げるのは、人文科学の深い学識に裏付けられた人格の陶冶と、卓抜した水準における学術研究を通じた社会への貢献である。	有・
文学研究科の目的	変更の有無
<p>人文科学の深い学識に裏付けられた人間形成と、卓抜した水準における学術研究を通じた社会への貢献を目的とする。そのためには、人文科学の領域において、現代の高度な学問の進展に応じた研究を推進し、人格を陶冶するとともに、その研究の成果を学界、教育界、一般社会に還元することが必要である。具体的には、それぞれの学術領域に大きな貢献をなす専門的研究者を養成すること、高い専門性を活かして実社会の様々な場所で活躍することのできる高度専門職業人を養成すること、そして知識基盤社会を支える高度で知的な素養のある人間を育成すること、のそれぞれを重視する。</p> <p>以下に専攻ごとの目的を掲げるとともに、さらに三専攻に共通する目標を示す。</p> <p>文化歴史学専攻 文化歴史学専攻は、真・善・美の理想を求めて空間と時間の中を生きる人間の基礎的構造及び歴史について、高度な教育研究を行う。</p> <p>総合心理学専攻 総合心理学専攻は、現代社会に生きる人間の心理的諸相について、認知・行動・発達の観点から、その病理を含めて、高度な教育研究を行う。</p> <p>文学言語学専攻 文学言語学専攻は、言葉を持ち文化を形成する人間の営為について、文学と言語の両面から高度な教育研究を行う。</p> <p>共通の目標 前期課程では、研究者養成の第一段階として、後期課程との連携も視野に入れた研究教育を行うとともに、高い学識と豊かな創造性を携えて社会に貢献できる人間を育成する。後期課程では、高度な研究を継承かつ推進していく博士号を持つ優れた研究者を養成する。</p>	有・
学位授与方針(DP)	変更の有無
<p>文学研究科のディプロマ・ポリシー(DP)を以下のとおり定める。</p> <p>文学研究科は、人文科学の基礎領域及び応用実践領域での研究者・高度専門職業人と、知識基盤社会を支える高度で知的な素養を有する人材の養成を目的としている。その目的に照らし、博士課程前期課程においては、高度な専門的知識を備え、柔軟な思考能力ならびに優れた技能を身につけた学生に対し、学位を授与する。博士課程後期課程においては、前期課程で得た知的素養を継承しつつ、現代の高度な学問の進展に応じた研究をさらに推進し、その成果を社会に発信していく能力を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p> <p>本研究科は、以下の専攻分野において、それぞれ次の方針に基づき学位を授与する。</p> <p>1. 文化歴史学専攻</p> <p>(1) 修士(哲学) 博士前期課程において、哲学倫理学に関する高度な専門的知識を備え、柔軟な思考能力ならびに優れた技能を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p> <p>(2) 修士(美学) 博士前期課程において、美学に関する高度な専門的知識を備え、柔軟な思考能力ならびに優れた技能を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p> <p>(3) 修士(芸術学) 博士前期課程において、芸術学に関する高度な専門的知識を備え、柔軟な思考能力ならびに優れた技能を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p> <p>(4) 修士(歴史学) 博士前期課程において、日本史学・アジア史学・西洋史学に関する高度な専門的知識を備え、柔軟な思考能力ならびに優れた技能を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p> <p>(5) 修士(地理学) 博士前期課程において、地理学地域文化学に関する高度な専門的知識を備え、柔軟な思考能力ならびに優れた技能を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p> <p>(6) 博士(哲学) 博士課程後期課程において、前期課程で得た哲学倫理学に関する知的素養を継承しつつ、現代の高度な学問の進展に応じた研究をさらに推進し、その成果を社会に発信していく能力を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p> <p>(7) 博士(美学) 博士課程後期課程において、前期課程で得た美学に関する知的素養を継承しつつ、現代の高度な学問の進展に応じた研究をさらに推進し、その成果を社会に発信していく能力を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p> <p>(8) 博士(芸術学) 博士課程後期課程において、前期課程で得た芸術学に関する知的素養を継承しつつ、現代の高度な学問の進展に応じた研究をさらに推進し、その成果を社会に発信していく能力を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p> <p>(9) 博士(歴史学) 博士課程後期課程において、前期課程で得た日本史学・アジア史学・西洋史学に関する知的素養を継承しつつ、現代の高度な学問の進展に応じた研究をさらに推進し、その成果を社会に発信していく能力を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p> <p>(10) 博士(地理学) 博士課程後期課程において、前期課程で得た地理学地域文化学に関する知的素養を継承しつつ、現代の高度な学問の進展に応じた研究をさらに推進し、その成果を社会に発信していく能力を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p> <p>2. 総合心理学専攻</p> <p>(1) 修士(心理学) 博士前期課程において、心理学に関する高度な専門的知識を備え、柔軟な思考能力ならびに優れた技能を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p> <p>(2) 修士(学校教育学) 博士前期課程において、学校教育学に関する高度な専門的知識を備え、柔軟な思考能力ならびに優れた技能を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p> <p>(3) 博士(心理学) 博士課程後期課程において、前期課程で得た心理学に関する知的素養を継承しつつ、現代の高度な学問の進展に応じた心理学の研究をさらに推進し、その成果を社会に発信していく能力を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p> <p>(4) 博士(教育心理学) 博士課程後期課程において、前期課程で得た学校教育学に関する知的素養を継承しつつ、現代の高度な学問の進展に応じた教育心理学の研究をさらに推進し、その成果を社会に発信していく能力を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p> <p>3. 文学言語学専攻</p> <p>(1) 修士(文学)</p>	有・

<p>博士前期課程において、日本文学・英米文学・フランス文学・ドイツ文学に関する高度な専門的知識を備え、柔軟な思考能力ならびに優れた技能を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p> <p>(2) 修士(言語学) 博士前期課程において、日本語学・英語学・フランス語学・ドイツ語学に関する高度な専門的知識を備え、柔軟な思考能力ならびに優れた技能を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p> <p>(3) 博士(文学) 博士課程後期課程において、前期課程で得た日本文学・英米文学・フランス文学・ドイツ文学に関する知的素養を継承しつつ、現代の高度な学問の進展に応じた研究をさらに推進し、その成果を社会に発信していく能力を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p> <p>(4) 博士(言語学) 博士課程後期課程において、前期課程で得た日本語学・英語学・フランス語学・ドイツ語学に関する知的素養を継承しつつ、現代の高度な学問の進展に応じた研究をさらに推進し、その成果を社会に発信していく能力を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p>	
<p>教育課程の編成・実施方針(CP)</p>	<p>変更の有無</p>
<p>博士課程前期課程及び後期課程のカリキュラムを通じて、以下のような教育を行う。</p> <p>文学研究科では、人文科学の持つ総合性と多様性を取り込んで、学位授与に至るまで充実した研究活動が展開できるカリキュラム編成をとっている。博士課程前期課程では 3 専攻 12 領域の多彩な専門領域を設け、必修科目の研究演習に加えて資料研究・特殊講義・特殊実験・臨床実践・文献研究といった各専攻と各領域の特性を活かした選択科目を提供し、それらを体系的かつ横断的に学ぶことによって専門分野の研究能力を高めるとともに学知の広がりを目指している。博士課程後期課程ではさらなる主体的・創造的な研究能力の深化と発展に向けて、3 専攻 11 領域体制のもと、各領域とも研究演習を経て博士論文作成演習に進むカリキュラムを設けている。</p> <p>各学位に関するそれぞれの年次毎のカリキュラムの理念は以下の通りである。</p> <p>1. 文化歴史学専攻</p> <p>(1) 修士(哲学) 博士課程前期課程の第 1 学年度では、大学院における学修・研究の基礎を定着させるとともに、哲学倫理学の諸領域の研究演習、特殊講義、文献研究などの科目を通じて、関連文献の読解や哲学的思考などの能力を鍛え、当該領域の専門的な研究能力を養成する。 博士課程前期課程の第 2 学年度では、第 1 学年度に引き続き、当該領域の専門的な研究能力を高めるとともに、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、当該領域において、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い修士論文を完成させる。</p> <p>(2) 修士(美学) 博士課程前期課程の第 1 学年度では、大学院における学修・研究の基礎を定着させるとともに、美学芸術学の諸領域の研究演習、特殊講義、資料研究などの科目を通じて、関連文献の読解や芸術作品の解釈などの能力を鍛え、当該領域の専門的な研究能力を養成する。 博士課程前期課程の第 2 学年度では、第 1 学年度に引き続き、当該領域の専門的な研究能力を高めるとともに、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、当該領域において、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い修士論文を完成させる。</p> <p>(3) 修士(芸術学) 博士課程前期課程の第 1 学年度では、大学院における学修・研究の基礎を定着させるとともに、美学芸術学の諸領域の研究演習、特殊講義、資料研究などの科目を通じて、関連文献の読解や芸術作品の解釈などの能力を鍛え、当該領域の専門的な研究能力を養成する。 博士課程前期課程の第 2 学年度では、第 1 学年度に引き続き、当該領域の専門的な研究能力を高めるとともに、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、当該領域において、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い修士論文を完成させる。</p> <p>(4) 修士(歴史学) 博士課程前期課程の第 1 学年度では、大学院における学修・研究の基礎を定着させるとともに、日本史学・アジア史学・西洋史学の諸領域の研究演習、特殊講義、文献研究、古文書学などの科目を通じて、資料・史料の読解などの能力を鍛え、当該領域の専門的な研究能力を養成する。 博士課程前期課程の第 2 学年度では、第 1 学年度に引き続き、当該領域の専門的な研究能力を高めるとともに、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、当該領域において、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い修士論文を完成させる。</p> <p>(5) 修士(地理学) 博士課程前期課程の第 1 学年度では、大学院における学修・研究の基礎を定着させるとともに、地理学地域文化学の諸領域の研究演習、特殊講義、文献研究などの科目を通じて、資料・史料の読解や実地調査の実践などの能力を鍛え、当該領域の専門的な研究能力を養成する。 博士課程前期課程の第 2 学年度では、第 1 学年度に引き続き、当該領域の専門的な研究能力を高めるとともに、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、当該領域において、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い修士論文を完成させる。</p> <p>(6) 博士(哲学) 博士課程後期課程第 1 学年度においては、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高める。 博士課程後期課程第 2 学年度においては、第 1 学年度に引き続き、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高める。 博士課程後期課程第 3 学年度においては、第 2 学年度に引き続き、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高めるとともに、博士論文作成演習を通じて博士論文執筆に向けた準備を進め、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、当該領域において、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い博士論文を完成させる。</p> <p>(7) 博士(美学) 博士課程後期課程第 1 学年度においては、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高める。 博士課程後期課程第 2 学年度においては、第 1 学年度に引き続き、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高める。 博士課程後期課程第 3 学年度においては、第 2 学年度に引き続き、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高めるとともに、博士論文作成演習を通じて博士論文執筆に向けた準備を進め、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、当該領域において、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い博士論文を完成させる。</p> <p>(8) 博士(芸術学) 博士課程後期課程第 1 学年度においては、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高める。 博士課程後期課程第 2 学年度においては、第 1 学年度に引き続き、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高める。 博士課程後期課程第 3 学年度においては、第 2 学年度に引き続き、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高めるとともに、博士論文作成演習を通じて博士論文執筆に向けた準備を進め、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、当該領域において、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い博士論文を完成させる。</p> <p>(9) 博士(歴史学) 博士課程後期課程第 1 学年度においては、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高める。 博士課程後期課程第 2 学年度においては、第 1 学年度に引き続き、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高める。 博士課程後期課程第 3 学年度においては、第 2 学年度に引き続き、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高めるとともに、博士論文作成演習を通じて博士論文執筆に向けた準備を進め、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、当該領域において、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い博士論文を完成させる。</p> <p>(10) 博士(地理学) 博士課程後期課程第 1 学年度においては、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高める。 博士課程後期課程第 2 学年度においては、第 1 学年度に引き続き、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高める。</p>	<p>有・</p>

<p>博士課程後期課程第3学年度においては、第2学年度に引き続き、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高めるとともに、博士論文作成演習を通じて博士論文執筆に向けた準備を進め、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、当該領域において、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い博士論文を完成させる。</p> <p>2. 総合心理学専攻</p> <p>(1) 修士(心理学)</p> <p>博士課程前期課程の第1学年度では、大学院における学修・研究の基礎を定着させるとともに、心理学の諸領域の研究演習、特殊講義、特殊研究、特殊実験、統計基礎理論、行動科学研究法、心理学実践などの科目を通じて、関連文献の読解や関連事項の実験などの能力を鍛え、当該領域の専門的な研究能力を養成する。</p> <p>博士課程前期課程の第2学年度では、第1学年度に引き続き、当該領域の専門的な研究能力を高めるとともに、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、当該領域において、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い修士論文を完成させる。</p> <p>(2) 修士(学校教育学)</p> <p>博士課程前期課程の第1学年度では、大学院における学修・研究の基礎を定着させるとともに、学校教育学の諸領域の研究演習、特殊講義などの科目を通じて、関連文献の読解などの能力を鍛え、当該領域の専門的な研究能力を養成する。</p> <p>博士課程前期課程の第2学年度では、第1学年度に引き続き、当該領域の専門的な研究能力を高めるとともに、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、当該領域において、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い修士論文を完成させる。</p> <p>(3) 博士(心理学)</p> <p>博士課程後期課程第1学年度においては、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高める。</p> <p>博士課程後期課程第2学年度においては、第1学年度に引き続き、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高める。</p> <p>博士課程後期課程第3学年度においては、第2学年度に引き続き、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高めるとともに、博士論文作成演習を通じて博士論文執筆に向けた準備を進め、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、当該領域において、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い博士論文を完成させる。</p> <p>(4) 博士(教育心理学)</p> <p>博士課程後期課程第1学年度においては、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高める。</p> <p>博士課程後期課程第2学年度においては、第1学年度に引き続き、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高める。</p> <p>博士課程後期課程第3学年度においては、第2学年度に引き続き、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高めるとともに、博士論文作成演習を通じて博士論文執筆に向けた準備を進め、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、当該領域において、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い博士論文を完成させる。</p> <p>3. 文学言語学専攻</p> <p>(1) 修士(文学)</p> <p>博士課程前期課程の第1学年度では、大学院における学修・研究の基礎を定着させるとともに、日本文学・英米文学・フランス文学・ドイツ文学の諸領域の研究演習、特殊講義、文献研究などの科目を通じて、関連文献の読解や文学テキストの解釈などの能力を鍛え、当該領域の専門的な研究能力を養成する。</p> <p>博士課程前期課程の第2学年度では、第1学年度に引き続き、当該領域の専門的な研究能力を高めるとともに、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、当該領域において、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い修士論文を完成させる。</p> <p>(2) 修士(言語学)</p> <p>博士課程前期課程の第1学年度では、大学院における学修・研究の基礎を定着させるとともに、日本語学・英語学・フランス語学・ドイツ語学の諸領域の研究演習、特殊講義、文献研究などの科目を通じて、関連文献の読解や言語事象の分析などの能力を鍛え、当該領域の専門的な研究能力を養成する。</p> <p>博士課程前期課程の第2学年度では、第1学年度に引き続き、当該領域の専門的な研究能力を高めるとともに、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、当該領域において、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い修士論文を完成させる。</p> <p>(3) 博士(文学)</p> <p>博士課程後期課程第1学年度においては、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高める。</p> <p>博士課程後期課程第2学年度においては、第1学年度に引き続き、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高める。</p> <p>博士課程後期課程第3学年度においては、第2学年度に引き続き、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高めるとともに、博士論文作成演習を通じて博士論文執筆に向けた準備を進め、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、当該領域において、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い博士論文を完成させる。</p> <p>(4) 博士(言語学)</p> <p>博士課程後期課程第1学年度においては、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高める。</p> <p>博士課程後期課程第2学年度においては、第1学年度に引き続き、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高める。</p> <p>博士課程後期課程第3学年度においては、第2学年度に引き続き、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高めるとともに、博士論文作成演習を通じて博士論文執筆に向けた準備を進め、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、当該領域において、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い博士論文を完成させる。</p>	
<p>学生の受け入れ方針(AP)</p>	<p>変更の有無</p>
<p>博士課程前期課程</p> <p>前期課程においては、豊かな人間性と幅広い教養をそなえた高度専門職を養成し、さらに研究者養成の第一段階として高度な専門的知識を教授するとともに創造的な研究のための柔軟な思考能力と優れた技能を育成します。そのために学部での学修の成果が一定の水準以上に達していることを入学試験が課す問題で証明することができ、そこから転じてさらなる研究に向かう強い意欲と計画性とを提示することができる者を求めます。</p> <p>博士課程後期課程</p> <p>後期課程においては、高度な研究の継承とそれを創造的に推進する博士学位をもつ優れた研究者を養成します。人文科学の領域において、現代の高度な学問の進展に応じた研究を推進し、その研究の成果を学界、教育界、一般社会に還元することを重視しています。こうした方針に基づいて修士論文を中心とする前期課程における学修の成果の裡に、自らの選んだ専門領域に関して幅広く研鑽を積んだ証と従来の研究に対峙しうる独創的な発想の萌芽的形態が見られる者、加えて後期課程入学後学位申請論文提出までのけっして短くはない期間を自立した粘り強い姿勢で研究対象と取り組んでいかれる者を求めます。</p>	<p>有・</p>
<p>教員組織の編制方針</p>	<p>変更の有無</p>
<p>人事委員会の機能を重視する。また現状を再検討し、課題があればそれを解決することに努め、年齢構成と男女比のバランスがとれた自由闊達で活気ある教員組織をめざす。</p>	<p>有・</p>

2. 実施計画

(1) 必須型

実施計画(タイトル)	1-(1)-② 三つのポリシーに基づく教学マネジメントの推進(3ポリシーの見直し・検証、カリキュラム見直し・拡充、カリキュラムマップの整備)			帳票の有無	不要
内容	<p>本学は、大学として「学部が共通に身に付けるべき知識・能力・資質」(「Kwansei コンピテンシー」)を時代に即して新たに定め、各学部・研究科はそれを土台に「各分野における学位授与に必要な知識・技能」である DP(ディプロマポリシー)を策定する。この DP は、すべての学生が卒業/修了必要単位数を取得した段階で修得しているべき学修成果を表したものである。この基本原理を守るべく、学部・研究科は(a)DP の再確認(b)DP と CP(カリキュラムポリシー)の整合(c)シラバスの実質化(d)シラバスに沿った成績評価(e)DP と AP(アドミッションポリシー)の連動、を厳格に運用する。</p> <p>本学はこうした学部/研究科による三つのポリシーに基づく教学マネジメントを統括し、大学全体の内部質保証を推進することで、卒業する全ての学生の質を保証する。</p>				
学部独自の取り組み内容	<p>3専攻12領域によって構成され、各専攻・各領域が専門性の高い研究・教育を行っている文学研究科においては、①文学研究科の DP・CP と各専攻・領域における教育内容との間の整合性の検証、②文学研究科の DP・CP と Kwansei コンピテンシーとの適合性の検証、③文学研究科の各授業と DP・CP との関係性をシラバスに明示する方法の整備 を同時に実施していく必要がある。この3点について、客観的なデータや具体的な方策を検討しつつ実施を進める。</p>				
<指標 1>	文学研究科の DP・CP と Kwansei コンピテンシーとの間の整合性に関する検証				
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標	文学研究科の DP・CP の記述内容の妥当性に関する再検討	文学研究科の DP・CP の記述内容と Kwansei コンピテンシーとの整合性に関する検証	前年度に引き続き、文学研究科の DP・CP の記述内容と Kwansei コンピテンシーとの整合性に関する検証	前年度に引き続き、文学研究科の DP・CP の記述内容と Kwansei コンピテンシーとの整合性に関する検証	
実績	2020 年 10 月の研究科委員会で DP・CP の記述内容と Kwansei コンピテンシーとの整合性について再検討を実施し、議論の結果、問題がないことを確認した。	2021 年 10 月の研究科委員会で DP・CP の記述内容と Kwansei コンピテンシーとの整合性について再検討を実施し、議論の結果、問題がないことを確認した。	2022 年 10 月の研究科委員会で DP・CP の記述内容と Kwansei コンピテンシーとの整合性について再検討を実施し、議論の結果、問題がないことを確認した。	2024 年 1 月の研究科委員会で DP・CP の記述内容と Kwansei コンピテンシーとの整合性について再検討を実施し、議論の結果、問題がないことを確認した。	
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標	Kwansei コンピテンシーとより整合性の高い DP・CP への改訂に向けた検討	前年度に引き続き、Kwansei コンピテンシーとより整合性の高い DP・CP への改訂に向けた検討	Kwansei コンピテンシーとより整合性の高い文学研究科 DP・CP の策定とその周知	前年度に策定した新たな文学研究科 DP・CP の妥当性の検証	
実績					
<指標 2>	文学研究科の DP・CP と各専攻・領域における教育内容との間の整合性の検証				
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標	文学研究科の DP・CP の記述内容の妥当性に関する再検討	文学研究科の DP・CP の記述内容と各領域・専攻の教育内容・カリキュラムとの間の整合性に関する検証	前年度に引き続き、文学研究科の DP・CP の記述内容と各領域・専攻の教育内容・カリキュラムとの間の整合性に関する検証	前年度に引き続き、文学研究科の DP・CP の記述内容と各領域・専攻の教育内容・カリキュラムとの間の整合性に関する検証	
実績	2020 年 10 月の研究科委員会で DP・CP の記述内容について再検討を実施し、議論の結果、美学芸術学領域の DP を一部修正することを決定した。	2021 年 10 月の研究科委員会で整合性の問題がないこと、一方で推薦入学試験制度の変更にもない、次年度以降に再検討が必要であることを確認した。	2022 年 10 月の研究科委員会で DP・CP の記述内容について再検討を実施し、議論の結果、問題がないことを確認した。	2024 年 1 月の研究科委員会で DP・CP の記述内容について再検討を実施し、議論の結果、問題がないことを確認した。	
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標	各専攻・領域の教育内容・カリキュラムとより整合性の高い DP・CP への改訂に向けた検討	前年度に引き続き、各専攻・領域の教育内容・カリキュラムとより整合性の高い DP・CP への改訂に向けた検討	各専攻・領域の教育内容・カリキュラムとより整合性の高い DP・CP の策定とその周知	前年度に策定した新たな文学研究科 DP・CP の妥当性の検証	
実績					
<指標 3>	文学研究科の各授業と DP・CP との間の対応関係をシラバスに明示する方法の整備				
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標	文学研究科の各授業と CP との対応関係の検証	前年度に引き続き、文学研究科の各授業と CP との対応関係の検証	CP により合致した各授業の再配置に向けた検討	前年度に引き続き、CP により合致した各授業の再配置に向けた検討	
実績	2020 年 10 月の研究科委員会で DP・CP の記述内容の再検討を実施した際、現在開講されている授業と CP とが十分に整合していることについても確認した。	2021 年度 10 月の研究科委員会で DP・CP の記述内容が検証され、中期計画総括シート作成にあたって現段階では整合性がとれていることが確認された。	2022 年度 10 月の研究科委員会で DP・CP の記述内容の検証を行い、現段階では開講されている授業との整合性がとれていることを確認した。	2024 年度 1 月の研究科委員会で DP・CP の記述内容の検証を行い、現段階では開講されている授業との整合性がとれていることを確認した。	
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標	再配置された各授業と、文学研究科 DP・CP との対応関係をシラバスに明示する方法についての検討	前年度に引き続き、再配置された各授業と、文学研究科 DP・CP との対応関係をシラバスに明示する方法についての検討	文学研究科 DP・CP との対応関係を明示したシラバスの運用の開始	文学研究科 DP・CP との対応関係を明示したシラバスの妥当性の検証	

実績				
大学基準協会による指摘事項(認証評価)	指摘事項	文学研究科文化歴史学専攻博士 課程 前期課程・後期課程において、「修士(美学)」「修士(芸術学)」「博士(美学)」「博士(芸術学)」は異なる学位にもかかわらず同一の学位授与方針を定めているため、是正されたい。		
	改善計画	(何を、どのように改善するか) すでに美学芸術学領域の教員が検討、変更案を作成し、領域代表者会議で確認、研究科委員会で承認済(2020年10月28日)。ホームページで公開済みである。		
	指摘事項	文学研究科博士課程前期課程では、研究指導計画として スケジュールを定めていない。		
	改善計画	(何を、どのように改善するか) すでに文学研究科執行部が研究指導の方法およびスケジュールを作成し、領域代表者会議で確認、研究科委員会で承認済(2020年10月28日)。ホームページで公開済みである。また、2023年度履修心得に掲載する予定である。		
<指標4>	評価の指摘事項に対する対応			
ロードマップ	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
目標		実施		
実績		対応済み		
<p>【2023年度の進捗状況・今後の取組み】 文学研究科では、昨年度より筆記試験(外国語)を廃止し、書類審査と面接試験(領域ごとに独自の書類提出や試験方式を取ることも認める)のみによる第一次学内推薦入試制度が実施している。それまで一般入試と同日に行っていたが、志願者があった領域ごとに面接試験日を個別に設定してこの試験を実施している。昨年度同様に、2023年度も複数の領域において志願者がおり、試験は問題なく実施された。この推薦入試制度によって入学した、博士課程前期課程の修了者が出るのが今年度となる。この推薦入試の効果や、授業、学位取得などに与える影響については、2024年度における報告で検討を行うこととする。</p>				

実施計画(タイトル)	8-(2)-① KGI・KPIの設定・活用			帳票の有無	不要
内容	<p>非営利組織である学校のマネジメントにおける最大の課題の一つは、最上位のアウトカム(成果)を定め、その達成度を測るKGIやKPIを設定することにある。学院ではKPIダッシュボード等のツールを活用して「Kwansei Grand Challenge 2039」(超長期ビジョン・長期戦略)および中期総合経営計画(実施計画・基盤計画)の進捗や達成度を含めた成果を検証する仕組みを構築する。そのために、教学・経営両面のデータ活用を司るのに最適な組織体制を確立する。また、各学校および大学の各学部も、全学のKPIと連動しながら個別の状況に合わせて独自にKPIを設定し、毎年その数値や取組状況を評価し、改善・促進の取組みに活用する。</p>				
学部独自の取組み内容					
<指標1>					
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	<p>※本帳票の末尾において、学修成果を測定する研究科独自のKGI・KPIを策定しており、これらの指標を用いて毎年度研究科における実施計画・全体の取組みの評価を行っている。</p>				
目標					
実績					
<指標2>					
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標					
実績					
【進捗状況・今後の取組み】					

実施計画(タイトル)	8-(10)-① 内部質保証体制の確立と運用			帳票の有無	要
内容	<p>本学には、従来から二つの大きなPDCAサイクルが存在していた。一つは中期計画(SGU 含む)であり、もう一つは大学の自己点検・評価および各学校の学校評価である。</p> <p>両者はそれぞれの目的体系を持ちながら重複する部分が多く、業務負担の軽減の観点からも、共通の目的・目標の下で学院・大学全体を見渡した統合的なPDCAサイクルの確立が必須となっている。</p> <p>このため、本学では、2019 年度から各学部／研究科、各学校が本格的に取組を開始する「中期総合経営計画」において、その取組の成果を定期的に測定、評価、改善することを通じて、効率的・効果的なマネジメントの実現を図る。</p>				
学部独自の取り組み内容					
<指標 1>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	※研究科における毎年度の本帳票の作成および学内各種会議体での点検・評価、改善活動などにより、内部質保証システムの PDCA サイクルを確立する。				
目標					
実績					
<指標 2>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標					
実績					
【進捗状況・今後の取り組み】					

3. 文学研究科のKPI

(1) 学修成果に関するKPI

KPI	定義	基準	現在値(2018年度)		2019年度		2020年度		2021年度		2022年度	
			M	D	M	D	M	D	M	D	M	D
学位授与数 (M・D・P)	修士、博士、修士(専門職)の学位授与数 (※乙号除く) 「大学基礎データ」	授与する学位数が多いほど○ (人)	M	非公開	M	非公開	M	非公開	M	非公開	M	非公開
			D	非公開	D	非公開	D	非公開	D	非公開	D	非公開
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		2027年度	
			M	非公開	M	非公開	M	非公開	M	非公開	M	非公開
			D	非公開	D	非公開	D	非公開	D	非公開	D	非公開
就職・進路決定率 (M)	就職・進路決定率 「キャリアセンター統計資料」	(就職+自営+就労継続)/(修了者 一進学者)	現在値(2018年度)		2019年度		2020年度		2021年度		2022年度	
			非公開		非公開		非公開		非公開		非公開	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		2027年度	
			非公開		非公開		非公開		非公開		非公開	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		2027年度	
博士後期課程への進学者数 (M)	進学者数 「キャリアセンター統計資料」		現在値(2018年度)		2019年度		2020年度		2021年度		2022年度	
			非公開		非公開		非公開		非公開		非公開	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		2027年度	
			非公開		非公開		非公開		非公開		非公開	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		2027年度	
日本学術振興会 特別研究員数(新規) (D)	特別研究員のうち、当該年度の新規採用者 「研究推進社会連携機構資料」		現在値(2018年度)		2019年度		2020年度		2021年度		2022年度	
			非公開		非公開		非公開		非公開		非公開	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		2027年度	
			非公開		非公開		非公開		非公開		非公開	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		2027年度	
研究者輩出数(D) (将来)			現在値(2018年度)		2019年度		2020年度		2021年度		2022年度	
			非公開		非公開		非公開		非公開		非公開	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		2027年度	
			非公開		非公開		非公開		非公開		非公開	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		2027年度	

(2) 研究科独自KPI

KPI	定義	基準	現在値(2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度					
文学研究科学生研究 支援金の申請者数	院生に対する研究支援金制度(学会発表 の旅費補助・研究発表ポスター作成費補 助・論文の外国語校閲料補助など)への 申請人数	申請者数が多いほど○ (人数)	非公開	非公開	非公開	非公開	非公開					
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		2027年度	
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開	非公開				
学会での院生による 発表件数	国内・国外で開催された学術学会での大 学院生による発表件数(口頭発表・ポス ター発表の合計)	発表件数が多いほど○ (件数)	現在値(2018年度)		2019年度		2020年度		2021年度		2022年度	
			非公開		非公開		非公開		非公開		非公開	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		2027年度	
			非公開		非公開		非公開		非公開		非公開	

(3) 学院全体のKPIに関する指標

KPI	定義	基準	現在値(2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度					
卒業後の進路の満足度	卒業後の進路の満足度 (「満足」～「不満」の5段階評価) 卒業時調査	5段階評価のうち「満足」と回答し た比率(%)	現在値(2018年度)		2019年度		2020年度		2021年度		2022年度	
			非公開		非公開		非公開		非公開		非公開	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		2027年度	
Well-being 度	現在の自分を取り巻く環境(特定 7 項目) に対して、あなたはどのように思います か。 (「そう思う」～「そう思わない」の 4 段階評 価) IR 卒業生調査	「E 時折、収入面が不安になること がある」を除く7項目対して A「そう思う」、 B「どちらかといえばそう思う」 と回答した割合の平均値	現在値(2018年度)		2019年度		2020年度		2021年度		2022年度	
			非公開		非公開		非公開		非公開		非公開	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		2027年度	
			非公開		非公開		非公開		非公開		非公開	

文学研究科実施計画・全体評価

2022年度の学位授与数は、昨年度よりも若干減少はしているが、おおむね例年と変わらない傾向を示している。修士号取得者の就職率は学部と遜色ない高い数値となった。修士号をもつ文系大学院の出身者の就職に関しては、わが国ではまだ一般企業を中心とした雇用者側の関心が低い、現執行部のもとで進めようとしている、研究者以外のキャリアパスの促進により、この数値を今後も継続して維持することができればと考えている。博士課程後期課程への進学者数は、ほぼ例年並みだと判断してよいだろう。領域によっては、長年博士課程後期課程への進学者がいないところもあり、個々の専門領域の事情などを考慮すると、それも致し方ないのだが、研究者養成の根幹に立ち返って現状を改善すべき時期にきているものと思われる。時間はかかるが、自前で養成した研究者が文学部・文学研究科の専任教員となる道筋について、各領域で検討を始めてもよいだろう。